

平成 25 年 2 月 26 日

環境大臣
石原 伸晃 殿

日本霊長類学会
会長 清水 慶子



千葉県に生息する外来種アカゲザルとニホンザルの交雑防止に関する要望

日本霊長類学会¹⁾は、霊長類の研究、および保護の問題に取り組んでおり、その重要な案件の一つがアカゲザルやタイワンザル等の外来マカク種との交雑の問題です。このような外来種問題は、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づいて、貴職が積極的な対応をとられ、社会的関心も高い問題であると認識しております。これまで青森県下北半島、および和歌山県におけるニホンザルと外来タイワンザルによる交雑が問題となり、全てのタイワンザルと交雑個体を捕獲する方向で対策が進められてきました。このような動きの中で、本学会は調査協力など関係県に積極的な支援を行ってきました。また、貴職に対しても、2007年1月12日付けにて「千葉県に生息するアカゲザル等の防除に関する要望」を提出した経緯がございます。

さて、千葉県房総半島南端にはアカゲザルが生息し、千葉県が対策に取り組んでいます。しかし、千葉県が最近実施した調査によれば、房総半島丘陵部のニホンザルの生息地において半島の突端から移籍してきたアカゲザルの雄が、ニホンザルの群れに入り込みニホンザルの雌との間に子孫を残していること²⁾、さらに、交雑個体が1.6パーセントに上ることが明らかになりました。これは決して小さな数値ではなく、将来にわたって外来遺伝子が拡散していく可能性を秘めた無視できない数値です。このようにニホンザルの群れ内で交雑個体が子孫を残すことは、和歌山県や下北半島では経験しなかった事態です。また、数世代の交雑を経て外見による交雑の判定が難しい個体がいることも明らかになっています。そのため、分散した交雑個体が見落とされる危険が高まり、房総半島のニホンザルのみならず、ニホンザル全体について交雑の危険は増したといわざるをえません。本学会はニホンザルの保全という観点からこれまで以上に大きな危機感を抱いております。

千葉県は、アカゲザルの生息が確認されて以来、モニタリング、捕獲など積極的な対策をとってきました。しかし、平成 24 年度以降は、予算上の問題から、これまで行われてきた交雑の遺伝的モニタリング事業を中止にしました。外見による交雑の判定が難しい状況から、遺伝的モニタリングは必須なのにも関わらずです。交雑がどの程度進行しているかの現状把握はまだ不十分です。ニホンザルの分布域全域について現状の評価

を正確に行い、それに基づいて管理の最終目標を立て、対策を迅速に実施する必要があります。現状評価の結果、個体群全体への交雑の浸透が低ければ交雑個体の捕獲と根絶が基本目標となりますが、交雑の浸透が極めて高ければ根絶でなく他地域への拡散の防止が基本目標となりえます。このような基本目標を立てるために、房総半島のニホンザルがアカゲザルの遺伝子の影響をどの程度受けているのか、これまで収集された試料やデータを徹底的に解析するとともに、いくつかの群れでは、群れ単位で交雑の浸透度を把握する等の必要があります。

千葉県におけるアカゲザルの交雑問題は深刻化し、過去どの自治体も経験してこなかった事態が生じています。また、房総半島以外の他地域への交雑の拡大も懸念されます。千葉県のアカゲザルとニホンザルの交雑は、一自治体だけでは対応できない問題であり、相応の規模と内容の調査と対策が必要だと考えます。

そこで、本学会は貴職に対し以下のことを要望いたします。また、環境省および千葉県がこれらの対策を実施される際には、本学会として協力を惜しまないことを表明いたします。

要望事項

交雑の拡大を防止するためには、房総半島のニホンザルの生息地全域にわたる現状を正確に評価するための調査とそれに基づいた管理の基本目標の策定が必要である。また、その目標に従い、効果的対策を、迅速に実施する必要がある。そのため、この一連の作業を環境省のモデル事業として行う等、千葉県に対して適切な支援を行うこと。

<注>

¹⁾ 日本霊長類学会は、霊長類の研究、保全に関わる学術団体です。詳細は、ホームページをご覧ください。<http://primate-society.com/>

²⁾ ニホンザルもアカゲザルも、原則として、雌は生まれた群れで一生過ごしますが、雄は群れから出て、ハナレザルになったり他の群れへ移籍したりします。

連絡先

大井 徹 (日本霊長類学会 保全・福祉担当理事)

〒305-8687 茨城県つくば市松の里1 森林総合研究所鳥獣生態研究室内

Tel: 029-829-8257 E-mail: toruoi@affrc.go.jp